

人」と改題、さらに数人の日本の同志も加わって『現社会』を発行活動した。

大正十二年九月一日、関東に大震災がおこり、その混乱の最中に「鮮人暴動」の流言が放たれるとともに朝鮮人虐殺が量的に行われ、同時に黒友会員、不逞社同人の多くが検挙され、そのなかには栗原一夫、小川武、野口品二、新山初代らもふくまれていた。彼らは最初、治安警察法違反（秘密結社）として検挙されたのであったが、大正十四年七月にいたってその大部分が免訴となり出獄した。しかし金重漢は爆発物取締法違反として禁錮三年、朴烈および妻金子文子は不敬大逆罪として大正十五年三月死刑を宣告され、勅令により無期懲役となった。（金子は栃木刑務所に服役中、同七月溢死した。）

この、いわゆる「朴烈事件」は震災時の「鮮人虐殺」にたいし、彼らの間にはこういう計画もあったという見せかけのため、日本政府がむりやりでっちあげた事件と見るべきであろう。

この事件で免訴となり朝鮮へ帰った洪鎮裕らは、同地で「黒旗連盟」を組織しようとしたが捕えられ、大正十五年七月には「黒友連盟」のいわゆる大邱事件がおこり、方漢相、申宰模、馬明らは、日本から送られた金正根、栗原一夫、椋本運雄らとともに獄に投ぜられた。布施辰治弁護士が昭和二年八月の『労働運動』誌上に発表したように、検事は栗原らにたいして「無政府主義を抱懐する」というだけの理由で懲役十年を求刑したが、金正根は獄死し、栗原らは懲役四年に処せられた。

なお労働組合運動としては、大正十三年に「東興労働同盟」が組織され、崔洛鐘、丁贊鎮、徐相漢、陳哲、李東淳、梁一童らこれに属し、吳宇泳、卞榮宇、鄭甲辰、李宗文らは「朝鮮自由労働者組合」を結成した。

また大正十四年末には、韓何然、李時雨らによって「自由青年連盟」がつくられ、昭和三年には丁贊鎮、金元善らが「黒色労働者連盟」を組織し、消長はあったが昭和十二年ごろまでつづいた。

当時、東京中野野方町に朝鮮学生寮「鶏林荘」があり、そこには金正根、宋映連、丁贊鎮、羅月煥らがあり、崔学柱、柳致真、安鐘浩らも行動をともし、学生以外の同志の集合所ともなっており、「鶏林荘」はまさに在東京朝鮮無政府主義運動の本拠の観があったが、昭和七年、朴春琴、李起東らの日鮮融合団体「相愛会」の暴力によって乗っとられ、その後運動が衰退するのであるが、これはただに朝鮮同志の運動だけではなく、昭和六年にはすでに満州事変もおこっており、世はあげて一大反動期にはいつてきた時代で、日本の社会運動も暗黒時代に追いこまれつつあったのである。

そのころ、朝鮮および在日本、在満州の同志、李学儀、丁贊鎮、朴有成、金豪九らが相たずさえて「一声」の運動があり、京城に秘密結社を組織し盛んに秘密出版をやったが、金豪九が逮捕されてから運動は伸びなかった。この「一声」の運動は平壤国旗事件の母体をなすものである。

黒色青年連盟

一時は左傾しつつあった労働総同盟も、大正十二年の中央委員会において、普選実施後は議会政治をみとめ選挙権を行使することを決議し、翌年二月の大会ではこれを正式に承認して、いわゆる「現実化」への転換を宣明した。

総同盟が右傾するとともに、他の労働組合にもこれに歩調を合せるものが出て、いままでも自由連合派にあった機械労働組合連合会も大正十三年三月に臨時大会を開いてその主張を変更するに至った。

労働組合だけではなく一般社会運動にも著しくその傾向を示してきたのには、もとよりいろんな原因があることもろんだが、一つには当時イギリスにマクドナルドの労働党内閣が成立したことが影響している。また一つには大正十一年以来あたりしく普通選挙運動がもりあがり、その実施近きにある様相を示してきたこと、社会運動者、労働運動者のなかからそれら議員の地位につける可能性も強くなってきたこと、以上のごとき原因も数えることができる。

無産政党组织の気運は、大正十四年二月の議会で普選案が通過するともいよいよ高まった。当時、労働総同盟と共産党系の労働組合評議会との関係は、分裂まもないこととて、そうとう深刻なあつれき状態にあつたので、政党組織実現のためには、もつとも無難な地位にあつた農民組合が中心となつて準備にあつた。そしてその間、かけ引きがあつたりまさつがあつたりしたが、ともかく情勢が進行して、同年十二月一日、神田青年会館で農民労働党の結党式が行われることになつた。かねて労働者農民の自主的運動を主張し、無産階級の政治運動を排撃しつづけてきた無政府主義諸団体は、この日、大挙して会場へおしかけ、政治運動反対の運動をした。

このときの共同行動が、その前からしだいに緊密の度を加えつづつあつた無政府主義諸団体の関係をさらに一層緊密ならしめることとなり、同十四年の暮の、その連絡機関として「黒色青年連盟」の結成を見るにいたつた。

おもな加盟団体は次のようであつた。

自我人社（栗原一夫、松永鹿一など）、労働運動社（近藤憲二、川口慶助、古川時雄など）、無軌道社（坂野八郎、坂野良三など）、黒旗社（高田格、大沼渉、山本勘助など）、黒旋風社（杉浦万亀夫、

緒方昇、増田英一など）、朔風会（武良二、岩佐作太郎など）、黒流社、黒色運動社、農村運動同盟（望月桂、木下茂など）、野蛮人社、社会生理研究会（八太舟三など）、解放戦線社（後藤学三、山崎真道、上田光敬、北浦馨など）、文芸批評社（松本淳三、麻生義、萩原恭次郎など）、無差別社（望月辰太郎など）、自然児連盟（山田作松、掠本運雄、横山樑太郎、前田淳一など）、

なお、関東労働組合連合会、東京印刷工組合、横浜印刷工組合、新聞労働連盟、通友同志会、市電自治会、芝浦労働組合など、労働団体の有志も参加した。

名は「黒色青年連盟」であつたが、年齢には関係なく、関東地方の無政府主義団体と労働組合内の人たちを網羅したものであつた。

連盟は、大正十五年一月三十一日、芝協調会館で第一回演説会を開いて氣勢をあげたが、そのとき官憲の圧迫の甚しかったのに憤激した連盟員は、「街頭に出でよ」の叫びとともに、黒色旗を先頭に銀座に殺到し、二十数軒の商店の窓硝子を破壊した。いわゆる「銀座事件」である。

この事件で、山崎真道、松浦良一、匹田治作、熊谷順二、荒木秀雄、北浦馨、秋山竜四郎ら七人が入獄した。

なお、この黒色青年連盟は大正十四年四年から機関紙月刊『黒色青年』を発行したが、毎月発禁でいくばくもつづかなかつた。

関東の黒連の成立にうながされて、大阪では黒社（久保護、逸見吉三など）、闘ひ社などの既存思想団体を中心として関西黒旗連盟を結成し、また六月には中部黒色青年連盟（伊串英治ら）が岐阜で演説会を開き、東北、北海道、中国、台湾、その他に黒色連盟がつくられて、それらの間には連絡が

保たれるようになった。

かくて黒連は、京成電車、日立製作所、その他の争議に、関西黒連は浜松楽器争議を応援するなど、現実の経済闘争にも活動した。

昭和二年七月、イタリアの無政府主義者サッコ、ヴァンゼツチの二人が、アメリカ政府の無理やりのでっちあげによって死刑を宣告されるや、いわゆる「サッコ、ヴァンゼツチ事件」として全世界の進歩主義者を憤慨せしめ、釈放運動がまき起されていたが、黒色青年連盟も全国労働組合自由連合会とともにこれに憤起し、相提携して築地小劇場で死刑反対演説会を開き、同集会が官憲によって解散を命ぜられるや、直ちに駆け足デモにうつり、アメリカ大使館になだれこんで抗議したこともあり、また対支出兵反対運動などにも活躍した。

その後の黒連

黒色青年連盟は前節で述べたように、だんだん全国的な組織になっていたのであるが、昭和三年にはいつて関東黒連の内部に紛争がおこり、大きくゆれはじめた。きっかけは連盟加盟の黒旗社同人にたいする一部の人たちの批判である。しかもこれを会員ぜんたいの問題として十分論議することなく、いきなりマルクス主義の影響をうけた共産主義者であると殆んど一方的に断定して排撃し、その機関紙『反政党新聞』をボイコットした。他の一部ではこの排撃を妥当でないとするものあり、また内紛状態を回避して疎遠になるものあり、黒旗社との間だけではなく、その間しばしば暴力沙汰まであって、連盟の足なみはひどく乱れてきた。

それだけではない、のちに述べる全国労働組合自由連合会と日本労働組合自由連合協議会（略して自連、自協という）との分裂の前後から、連盟の内外にアナキズムとサンジカリズムとの議論が盛んに行われ、そのころよく使われた「純正アナキスト」派のなかにはアナルコ・サンジカリズムをもって革命の妨害物なりというものさえあって、これが連盟の内部に複雑な現象をきたし、事実上、黒色青年連盟に見切りをつけて脱退するものが多くなった。（この間の事情については、あとで述べる汎太平洋労働組合会議、およびその後の全国自連の項をも参照されたい。）

関東だけではなく、まず関西黒旗連盟が関東黒色青年連盟の自己批判を求めて連盟から去り、その他各地方の脱退もあって、最初は無政府主義諸団体の連合体であった連盟が、ついには「黒色青年連盟」と称する一小団体となった観を呈するに至ったのである。

黒色青年連盟はその後、前田淳一、高木寿之助（菊岡久利）、山崎真道らによって継続されてはいたが、満州事変などによる社会情勢の変化とともに自然解消にいたったのである。



話が前後するが、当時の出版物について記しておく。

これよりさき、労働運動社は昭和二年一月から雑誌型にして第五期『労働運動』を発刊し、近藤憲二と古川時雄とが主として経営にあたり、山鹿泰治、岩佐作太郎、石川三四郎、水沼辰夫、新居格、小池英三、八太舟三らが多く執筆していたが、同年末に経営困難のため休刊、翌年になって当時の無政府主義運動内の足なみ不調も何ほどか反映して、労働運動社について解散した。

なお大正末期から昭和の初めにかけて発行されていた機関誌には、加藤一夫の『原始』、農村運動

同盟の『小作人』、望月桂らの『労働者』、自我人社の『自我人』、古川時雄、能智修弥ら論戦社の『論戦』、黒旋風社の『黒旋風』、広海貫一らの『緑』、黒旗社の『黒旗』、後藤学三らの『解放戦線』など多数あり、静岡には牧野秋二らの『大衆評論』、名古屋には伊串英治の『名古屋労働者』、大阪には久保護、逸見吉三らの『黒』、久保、逸見、中尾正義、平井貞二らの『関西自由新聞』(のち『自由新聞』と改題)、関西黒旗連盟の『黒色運動』などがあつた。

大阪で福田国太郎が出していたエスベラントの月刊雑誌 Verda Utopio (ヴェルダ・ウトピオ、緑のユートピア) は十二号までつづいた。東京では昭和二年山鹿泰治、小池英三、島津末二郎、古河三樹松、平松義輝らが La Anarkist を出して各国へ送り、やはり十二号まで発行した。

また近藤憲二、安成二郎によつて、大正十五年九月から『大杉栄全集』九巻、『伊藤野枝全集』一巻が刊行されたことと、川合仁の近代評論社で『バクーニン全集』全十巻の刊行を企画し、中途挫折したが、昭和七年までに三巻を出したこと、小池英三、久保護が主として編集にあたり『クロポトキン全集』全十二巻が完成したことなども、記しておかねばならないであらう。

上海労働大学

一九二七年(昭和二) 上海の郊外江湾(チャンワン)に国立労働大学が設立されることになり、岩佐太郎が招かれて行つた。労働大学の学生は全中国から集まつた男女約五百名、副校長沈仲九はアナキストであり、ここをアナキストの闘士養成所たらしめようとしていたのである。講師のうちには、かつて東京留学中、日本のアナキストと交わりのあつた同志の張景があり、のちには石川三

四郎、山鹿泰治も招かれて行き、石川は東洋文化史、山鹿はエスベラントを受持つた。三人とも、もとより密航したのである。しかし国民党政府の圧迫が加わり、沈仲九は節を守つて職を辞し、ヨーロッパへの旅に出た。途中、東京にも立寄り、日本の同志とも逢つた。そのころ衛安仁、張易、毛一波、索非らが留学していた。

当時、上海には武良二がいつており、軍隊から脱走中の赤川啓来もいつていた。

石川、山鹿は労働大学に一学期いて帰つたが、岩佐はさらに居残つていて、のち赤川とともに同志梁竜光と同道、厦門をへて、福建省の泉州へ行き、民団訓練所に滞在した。

民団訓練所というのは、人民のことは人民自身で解決するという無政府主義を実現するために、その文字の通り、民団を組織するための闘士養成所であり、軍隊でいうならば士官学校のようなものであつた。この訓練所の生徒は百人足らず、軍隊は三百人を出なかつたが、泉州地方ぜんたいに勢力をもつていた。

訓練所の中心人物は秦望山で人望を集めており、朝鮮の李又観が参謀をしていた。しかしこの訓練所一党は同地の海軍に圧迫されて泉州を退去するのよぎなきにいたり、さらに後には十一路軍のために訓練所は解散を命ぜられたのであつた。かくて岩佐は、山鹿たちよりもおくれで日本に帰つた。

(江湾の労働大学は上海事変のとき日本軍によつて破壊されたのであるが、そのときの抗日学生軍の指揮者は、かつて泉州の民団訓練所にいた李少将であつたという。)

全国労働組合自由連合会の結成

大正十一年（一九二二）大阪天王寺公会堂で開催された日本労働組合総連合結成準備会が決裂してから、自由連合派のなかにあった機械労働組合連合会が、大正十三年三月の臨時大会においてその主張に変更をくわえて右傾したことは前に述べたが、印刷工組合の「信友会」、新聞工組合の「正進会」は、同一主張、同一産業における労働組合の整理に着手し、まずこの両組合で大正十二年六月から「印刷工連合会」を組織して、共同の機関誌『印刷工連合』をもつことになった。

その後、京都印刷工組合、函館新聞工組合親工会も加わるにおよんで、大正十三年四月、印刷工連合の第一回大会を開催するとともに、全国各地の同工によりかけてその組織をうながし、同年十一月「東京印刷工組合」を結成した。そして、以上のほか、大阪印刷工組合、横浜印刷工組合、千葉の千工会、長野の兄弟会、前橋の三山会が加盟し、のちには札幌印刷工組合、熊本印刷工組合などが加わって、しだいにその勢いを増していった。

一方、岡山地方においては、総同盟の官僚主義に反対し、労働者の自主自治を主張する五組合によって、大正十三年三月、中国労働組合連合会が組織され、関西においても京都、大阪、神戸などの自由連合派組合が関西労働組合自由連合会を結成、また関東においては、東京印刷工組合、新聞連盟、機械労働組合連合会の方向転換とともにこれから脱退した機械技工組合と、芝浦労働組合から分離して創立した電機鉄工組合、自動車技工組合、輝醒労働組合、東京製菓工組合の五組合の連合体、関東自由労働者組合連合会などの代表者は相会して、同一主張組合の全国的連合の前提としてまず関東地

方の連合体を組織する運動がはじめられていた。

かくて自由連合主義を標榜する労働組合の全国的連合の気運はいよいよ高まり、大正十五年五月二十四日、東京浅草の統一閣において水沼辰夫を議長として「全国労働組合自由連合会」の結成大会を開催するにいたった。加盟組合は、

関東労働組合自由連合会

関東自由労働組合連合（江東自由労働者組合、自由労働相互会、千住自由労働者組合、横浜自由労働者組合）、東京印刷工組合、東京新聞労働連盟、横浜印刷工組合、機械技工組合、日立従業員組合、東京製菓工組合、上毛印刷工組合三山会、静岡合成労働組合、静岡新聞労働組合、埼玉小作人組合、

関西労働組合自由連合会

京都印刷工組合、大阪印刷工組合、大阪機械工組合、神戸自由労働者組合、

中国労働組合自由連合会

岡山純労働者組合、岡山機械工組合、岡山紡績労働組合、岡山ゴム労働組合。

広島労働組合自由連合会

広島自由労働者組合、純労働者組合、呉自由労働組合、広島ゴム工組合、広島印刷工組合。

北海道

函館印刷工組合、札幌印刷工組合。

であり、全同自連の「綱領」は、次ぎのとおりであった。

一、われ等は、階級闘争を以って労働者小作人解放運動の基調とする。

一、我等は、一切の政治運動を排斥し、経済的行動を主張する。

一、我等は産業別組織による自由連合主義を提唱し、中央集権主義を排撃する。

一、我等は、帝国主義的侵略に反対し、労働者階級の国際的団結を標榜する。

そして、大正十五年六月から機関紙『自由連合』を発行した。

かくて全国自連は、その後、東京瓦斯工組合、京都一般労働組合、横浜黒色一般労働者組合、東京一般労働組合、泉州純労働者組合、朝鮮自由労働組合、神戸純労働者組合、常盤一般労働組合、東京食糧労働組合、大阪合成労働組合、和泉漁業労働組合、新潟一般労働者組合、旭川純労働者組合などを加え、活発な自由連合主義の組織活動をなしつつあった。

汎太平洋労働組合会議

全国労働組合自由連合会は、頻発する労働争議や失業問題に奮闘するとともに、田中軍閥内閣が山東に出兵するや敢然として即時撤兵の運動をおこし、ムツソリニのファシスト政権が樹立されて労働運動弾圧の拳に出るや、全国自連はただちにイタリア製品ボイコットの運動をおこすなど、帝国主義反動にたいする運動も活発にやった。また労働運動の国際的提携のために汎太平洋労働組合会議へ代表をおくるなどのこともあった。

この汎太平洋労働組合会議は、最初、ニュー・サウス・ウェールズ労働組合会議の主催でオーストラリアのシドニーに招集されるはずであったが、いろんな事由で主催事務は中国の労働組合に委任せられ、一九二七年（昭和二）五月一日、広東で開催されることになっていった。

東京印刷工組合の山鹿泰治は、ひとつには極東労働組合インターナショナルの組織促進を希望するところから、またこの会議に各国の革命的労働組合が参加するであろうとの見とおしから、これに代表をおくりたいとの緊急動議を関東労働組合自由連合大会に提出して承認をえたので（のち全国自連においても承認）小委員会の結果、江東自由の歌川伸、東京一般の水沼熊、松本親敏、東京印刷工組合の大塚貞三郎の四人が代表に選任された。

代表は同年五月一日前後に広東に到着したが、同地では武断派による共産党弾圧が行なわれた直後で汎太平洋労働組合会議を開催するどころではなく、主催者たちはその開催地を武漢政府の所在地である漢口に変更していたのであった。そこで代表の大塚はその事情を報告するため日本に帰り、水沼も上海から引きかえし、結局、歌川と松本だけが会議の数日前に漢口へ到着したのであった。

しかし代表が漢口に着いてみると、会議の構成分子は最初予想していたのと全くちがいがい、参加者はことごとく共産主義者であった。ことに日本から出席していた統一運動同盟の代表者は自連代表の着席を阻止しようとさえしたが、種々の曲折をへて出席を承認されたくらいであった。

出席代表は「中国」全支総工会の李立燦ほか十七名、「ロシア」全ロシア労働組合評議会および赤色労働組合インターナショナルのロゾウスキーほか四名、「北米合衆国」労働組合教育同盟のブラウダーほか一名、「フランス」統一派労働総同盟のラカモン、「イギリス」労働組合会議少数派のトム・マン、「日本」統一運動同盟の山本ほか四名、全国自連の歌川、松本、「ジャワ」イリミンほか一名、「朝鮮」金。（インド代表ロイほか三名は会議後に到着した。）

会議はロゾウスキーを議長として五月二十日から二十七日まで行われたが、もとより共産党の勢力

拡大工作のための集まりであったので、自連代表は議案のうち、朝鮮、台湾の被圧迫民族解放に関する決議と、サッコ、ヴァンゼツチ釈放の決議にたいして態度を明確にしただけで、それ以外のことにたいしては意志表示をなさなかつた。議案中には明らかに反対のものがあつたが、なにしてる言葉が不自由であつたうえに、会議出席者が挙げて共産主義者であり、開催地が共産党の本拠漢口であつたので、隠忍せざるを得なかつたというのである。

全国自連では、代表が帰つてからの報告にもとづいて、汎太平洋労働組合会議に参加するか否かの論議があつたのであるが、その間、代表の報告の手ちがいなどもあり、かつ黒色青年連盟からの強い反対もあり、そのうえ、のちに代表が関知しなかつた「宣言」のなかに看過できないものがあつたことも明らかになつて、自連は「赤色帝国主義」の陰謀を指摘し、汎太平洋労働組合会議の発した決議および宣言にたいしてなら責任を負わざるものであることを明らかにして、会議への不参加を声明したのであつた。

この問題は、これ一つだけを切りはなして見ればさしたる出来ごとではなかつたのであるが、これが機会となつて全国自連のなかへ黒色青年連盟の力が加わることになり、のち組合内に「純正アナキズム」と「サンジカリズム」との対立がおこるきつかけとなつて、後年、全国自連が分裂して「日本労働組合自由連合協議会」が結成される遠因をなすのである。

その後の全国自連

全国労働組合自由連合会の第二回大会は、昭和二年十一月十九、二十日の両日、東京浅草本願寺内

の心光会館で開催されたが、同大会はまったく、大阪合成労働組合の除名問題による紛糾に終始したのであつた。

大阪合成はかねて関西自連に加盟していたが、大会前、運動方針の相違を理由に同連合会からの脱退を声明し、関西自連もまた合成労働をもつて自連の規約綱領にていしよくしたものとて除名していたのである。しかるに合成労働は、関西自連からは脱退したが、全国自連からは脱退しない旨を発表し、大会に代議員をおくつてきた。これにたいし関西自連では、関東側が合成労働の着席を認めるならば同席をこぼむとの決議をもつてきたので、大会は開会したもの議事にはいることができず、関東自連はまず、関西自連および合成両者のいい分をきくことになつた。

合成労働からは中村房一、山中正、関西自連からは平井貞二、逸見吉三が説明にあたり、結局、合成労働の除名が決定されたのであるが、この二日間にわたるもんちやくで大会の予定日数を使い果たし、翌年春再開の決議をしてこの大会は流会になつた。

自連第二回統行大会は、予定どおり昭和三年三月十七、十八両日、東京本郷の東大仏教会館で開催され、この大会で最も大きな問題になつたのは、全国自連の綱領改訂の問題であつた。すなわち従来の綱領が（これは前にもかかかておいたが）

一、我等は階級闘争を以て労働者小作人解放運動の基調とする。

一、我等は一切の政治運動を排斥し経済的行動を主張する。

一、我等は産業別組織による自由連合主義を提唱し、中央集権主義を排撃する。

一、我等は帝国主義的侵略に反対し、労働者階級の国際的団結を標ぼうする。

というのであったのを、東京印刷工組合の改訂案は、

我等は自由連合主義を以て労働農民解放運動の基調とする。

という一つだけにせよというにあり、これにたいし東京自由労働者組合は、

一、我等は階級闘争を以て労働者農民解放運動の基調とする。

一、我等は政党政派によらず一切の権力に対し労働者農民自らの力を以て抗争する。

一、我等は自由連合組織を強調し中央集権組織を排撃する。

一、我等は帝国主義に反対し、労働者階級の国際的団結を促進する。

とせよという案であった。

東京印刷工組合案の説明者（綿引邦農夫、布留川信）によれば、階級闘争は肯定否定の問題ではなく、われわれが生存しているということによって不可避的事実である。これを掲げないからといって階級闘争を否定するのではない。ではあるが、普通選挙制施行後、わが自由連合会を除くほとんすべてが政治運動に没入している。しかもわが自由連合会の綱領といえども極めて消極的であった、この重大なる時機に際して、よく自由連合主義の真髓を把握し、これを昂揚することができないから、提案のごとくしたいというのである。（当時の自連機関紙『自由連合』による）

これにたいし東京自由労働者案は斎藤孔、大沼渉、歌川伸、高田格の四人が各項につき説明した。同案は従来の自連綱領と大同小異で、辞句の訂正程度のものであったが、場内にはこの両案の円満なる談合を許さない険悪な空気がみなぎり、ことに第二日の会場は混乱を極め、東京自由労働側の討論はほとんど封じられたかたちで、怒号と罵声にうずめられる中に、東京自由労働者組合、東京食糧労働

働組合、および東京一般労働組合の江東（高橋光吉、江西一三郎）、南葛（山本勘助ら）両支部は喊声をあげて一斉に退場し、大会は以上の組合ならびに支部除名の決議をしたのである。

当時の自連内の一方には「階級闘争」にたいし、階級闘争を基調とする運動は、永久に支配関係を消滅させる運動とはならず、その本質において、資本主義となんら異なるところのない経済的利益追求であり、権力主義であり、独裁容認の運動であると主張するものあり、他の一方には、彼らの主張は日常闘争を無視する抽象的、観念主義、否定主義であるといい、この対立が大会で正面衝突し、結局後者の脱退となったのである。

かくて、前に述べたように、全国労働組合自由連合会内に次第に勢いを加えつつあった黒色青年連盟の力が、この続行大会を機会にいよいよ表面に現われてくるのである。

日本労働組合自由連合協議会の成立

昭和三年三月、全国労働組合自由連合会から、東京自由労働者組合、東京食糧労働組合、および東京一般労働組合のなかの江東、南葛両支部が脱退したことは前回に述べた。しかし東京一般労働の北部支部、城南支部は引きつづき全国自連にとどまっていたのであるが、全国自連が労働団体というよりもむしろしだいに思想団体のごとく傾向をくわえ、機関紙『自由連合』は『自由連合新聞』と改題され、岩佐作太郎、八太舟三らも執筆し、いよいよ階級闘争否認、サンジカリズム排撃の方向にすすみ来ったので、北部支部は自連から脱退して、さきに脱退していた江東支部、南葛支部とともに、昭和四年七月「関東一般労働者組合」を結成した。

関東一般労働者組合はさらに、関東出版産業労働者組合、関東金属労働者組合、関東化学労働者組合、京浜合成労働組合とともに、昭和四年七月「関東労働組合自由連合協議会」（略称、関東自協）を組織し、機関紙『黒色労農新聞』を発刊するにいたった。この関東自協結成までには、江西一三、高橋光吉、白井新平、鶴岡直和、小川猛、水沼浩、村田常次郎、宇田川一郎、その他が尽力した。

関東自協は、結成の翌年すなわち昭和五年四月、東京千住の日本染絨争議が勃発し、組合員百七十人が工場内でハンガーストライキをつづけるという、当時有名な争議があり、つづいて深川の尼宮鉄工争議などを果敢に戦い、また浅草の橋場に消費組合を設けたりした。

なお関東自協は、東京ガス会社の社外工争議を応援し、田所茂雄らが深川小名木の瓦斯タンクを占領して黒旗をひるがえし高空示威を行なうなどがあったが、この東京ガス争議はその応援中において、全国自連との間のかねてからの感情のもつれが、イニシアティブのことから爆発衝突して、自連と自協の両者がはげしく相対立した。

これよりさき、全国自連に加盟していた関西労働組合自由連合会も、関西黒旗連盟の黒色青年連盟からの脱退と同時に全国自連から脱退して「関西労働組合自由連合協議会」となった。当時の関西自協の所属組合は、大阪印刷工、大阪自総、関西金属、神戸合成などである。

そして、以上の関東自協と関西自協と、それに名古屋の中部黒色一般労働組合、新潟の新潟全産業労働組合なども参加して「日本労働組合自由連合協議会」を結成するのである。なお関東自協の機関紙『黒色労農新聞』は『労働者新聞』と改題し、日本自協の機関紙となった。

また関東自協の高橋光吉、白井新平、田所茂雄、岩橋佐吉、水沼浩、山田健助らは、森辰之介（本

名、荒川芳夫）、塩長五郎らとともに日本自協派の理論誌『黒旗の下に』を発刊、石川三四郎、近藤憲二らもこれを援けた。

かくて、わが無政府主義の組合運動は「自連」「自協」の両派にわかれ、その抗争の影響は無政府主義文学運動のなかにも持ちこまれ、この状態が昭和八年まで約五年間つづくのである。

この間、日本の社会情勢はしだいに変化しつつあった。すなわち満州事変が勃発したのは一九三一年（昭和六）であり、翌年には上海事変がおこり、五・一五事件（犬養首相暗殺）、満州国の建設などがあり、大陸の戦雲あわただしく動くとともに、反動思想はいちじるしく抬頭し、労働組合運動においては労働総同盟の右傾をはじめ愛国的労働団体の設立されるあり、あげて反動の波におされつつあった。

かくのごとき情勢下において、自連、自協とも大いに顧みるところあり、「日本自協は自己のもつ労働組合第一主義の誤謬をさとり、全国自連においても日常闘争の放棄、セクト的偏向ならびにその他の悪傾向に鋭い批判を加えて、各自、自由連合戦線の強化発展に努力しつつあったが、昭和七年末ようやく相互の融合的機運が醸成されるにいたり、八年三月、日本自協関東地協第三回大会は全国自連との共同闘争を決議し、全国自連第三回大会も同じく共同闘争を決議し、以後積極的な共同闘争の結果」ついに昭和九年一月、両者の合同を声明して自協は自連に復帰するのである。（カッコ内は当時の合同声明から抜萃）

しかしながら時すでにおそく、所属組合はいちじるしく衰退の途をたどり、世はあげて反動の渦巻きの中にあり、官憲の圧迫はいよいよ自連の凋落をよぎなくせしめるのである。